

顕

彰

会

便

り

No.13

平成8年(1996)12月15日

編集・発行

津田左右吉博士顕彰会

美濃加茂市島町2-5-27

TEL 0574-28-8551



「老夫戦后を守る」は旧下米田村役場に
展示してありました。



山田貞實画伯



津田博士の母 勢以さんが作られた人形

勢以さんのおもいで

山田貞實談

津田家と私の家とは100メートルほど離れたところがありました。当時は大きな竹藪があったことを思い出します。津田先生のことにはここに立派な人がいたくらいのことしか知りませんでした。先生のお母さんの勢以さんのことはよく覚えております。

勢以さんと母とは姉妹のような付き合いをしていた関係で、津田家によく遊びに行っており、私は実の子どもか係のように可愛がられておりました。優しく、温厚で人柄が立派な方でした。

私が津田家へ行くと勢以さんは、

お米のはざしたお菓子や豆の炒ったものなどをくださいました。私は津田家へ行くのが楽しくてしやうがなかったです。ひなまつりや特別の日には、いろいろなお菓子やおはぎなどを近所の子どもらにもらいに行っていました。勢以さんの料理で私が好きだったのは、野菜のところがしで、美味しかったことを覚えております。

勢以さんは針仕事をしていても器用でした。この近所(下米田町周辺)の女の子はみんなここで裁縫を習っていました。私は人形などをもらって遊んだような記憶がありますが定かではありませぬ。私は勢以さんから裁縫の代わりに折紙を習いました。いろいろなものを作りましたが、折紙でおひなさまを作ったことを昨日のことのように覚えております。

山田貞實 (やまださだみ)

1915年生まれ。

美濃加茂市下米田町東柄井出身。日本墨絵会会長。全日本水墨画会会長。独立美術協会会長。日本美術家連盟会員。元玉川大学教授。戦後、下米田中学校の教諭として2年間務める。

このお話は、平成八年十二月三日、「山田貞實展」で来場された山田画伯、津田博士についてお聞きしたことをまとめたものです。

津田賞について

会長 佐合隆治



津田賞は回を重ねるごとに募集範囲が拡大し、本年度は付知小から優秀な作品を出品していただき、誠によるこぼしいことです。津田博士の遺徳を後世に残すため、子ども達に、自分たちの意見を文字で表現することの大切さを知っていただくとともに、津田顕彰会の活動をより理解していただくため、永年にわたり続けてきました。しかし、募集範囲を広げてきますと、「津田賞とは何か」というコンセプトが必要だと考えるようになってきました。将来、津田賞を日本の賞とするためには、大勢の人々に理解していただきやすいコンセプトが必要だと考えます。

津田顕彰会の会長をつとめさせていただいて以来、津田博士の求めた学問の深さを知らせ、知るほど、博士が求めていたものは何かということを私は考えてきました。今日のように

な情報化社会の中、さまざまな情報の氾濫により、人々ほどの情報がか戸惑いがちである。そして、歴史書の中にも、真に時代を認識せずに、情報やプロバガンダ(宣伝)に流されてしまうものがあるのではないかと感じています。今の時代こそ冷静な目で、この世の中をみわたす事が必要ではないでしょうか。このような意味合いから、二十一世紀をなう子供たちが正しい歴史感をもつことや、新たな時代を創造する力が身につけられることを津田賞は目的とします。

これから多くの人々に期待されるような津田賞となることを夢みつつ、来年以降もたくさん作品を応募していただくことを楽しみにしております。



第12回 津田左右吉賞 作文発表会

顕彰会が主催する第十二回津田左右吉賞作文の発表会が東図書館で十月十九日に行われました。受賞者は緊張しながら賞状と記念品を受け取りました。発表者は夢や理想を自分のことばで表現し、その表情はどれもはつらつとしていました。受賞者は次のとおりです。

小学生の部

【最優秀賞】
山之上小 5年 片桐 佳祐
父のようにになりたい



【優秀賞】
古井小 5年 座馬 真代
だれにでも親切に
できる人になりたい
古井小 6年 安江 智希
私はこんな人になりたい

【佳作】
伊深小 6年 大矢 亮輔
美しい川と伊深を大切に
南帷子小 5年 桜 静香
大切なのは…

古井小 6年 清水 麻乃
私はあきらめない
人になりたい

東白川小 5年 長尾 香里
お年寄りを大切にしたい
桜ヶ丘小 5年 長谷川達也
友達

古井小 6年 日比野真由子
私はこんな人になりたい

伊深小 5年 平臨 敬規
ぼくはこんな人になりたい
付知北小 6年 三尾あすか
「わが家は美術館」

八百津小 6年 山内香名子
私のお母さん

古井小 5年 渡辺 貴光
稲穂の光る美濃加茂市
下米田小 6年 渡辺 奈々
津田左右吉博士

山田貞賞



中学生の部

『最優秀賞』

西 中 3年 岸 宏有記
理想の郷土



『優秀賞』

広陵 中 3年 犬飼ゆかり
人はみな「哲学者」

東 中 1年 吉村 有美
看護婦をめざして

『佳作』

双葉 中 3年 小関 菜穂
私の「友達論」

神洲 中 3年 加藤 清夏
私たちの忘れもの

東可児 中 3年 河島 俊一
「友達」

八百津 中 3年 永田 恵梨
友達

川辺 中 3年 白村 隆
友情とは何か

西 中 3年 堀江 耕太
友達とはなんですか

西可児 中 3年 村上奈保子
人の支えとなること

津田左右吉博士 ゆかりの地を訪ねて

大澤 功

博士のゆかりの地（場所）は全国数ヶ所ありますが、何といても郷里美濃加茂市を第一にあげなければなりません。

生家（東栃井）

その庭先に『津田左右吉博士生誕の地』の碑が建っています。父藤馬さんの墓所が東栃井の高月墓地に、母勢以さんは信友の墓地とわかれて眠っています。勢以さんの石碑の傍らには津田博士が東京から移植したクチナシの花が植えています。津田家の菩提寺は兼山町浄音寺です。ここには津田家の祖先の位牌が供養されており、梵鐘には「津田左右吉」の名が刻まれています。津田左右吉をイメージされたモニュメントが市中央図書館玄関左脇にあります。『知の積層』と名付けられた石塔は郷土出身の彫刻家故佐光庸行氏の手によるものです。「自分の背丈ほどの著書を書きたい」という少年時代の夢を表現したもので、博士の生涯を象徴



昭和三十五年、
下米田町東栃井の高月墓地。父の墓参

したモノキュメントです。館内には、郷土の文豪坪内逍遙と並び、津田博士の写真や小学校の卒業証書が展示されています。書棚には津田左右吉全集など、博士の著書が並べられています。

下米田小は津田博士の母校です。校長室には博士の肖像画（有名な壁画家寺崎武男氏画）や多くの写真があります。特に書斎における博士を尾関公見元校長が撮影されたものは学問にいそしまれている様子がよくわかります。博士がこの小学校の卒業生であることを記した学籍簿や、開校以来の卒業生の記録も残っています。前庭には津田博士の胸像が建てられ、毎日登校の児童を優しく見守っています。（平成四年十月建立）

市教育委員会文化課

津田博士の遺品(早稲田大学卒業記念の文鎮、机、つづら、アルバムなど)東京専門学校得業(卒業)証書(コピー)、陣笠、著書、博士が愛用された品などが保管されています。

渡辺譲氏宅(下米田町信友)

津田博士の長妹きくさんの御子孫である譲氏宅には、津

田家伝来の宝刀、槍その他の品が保管されています。

故尾関公見氏宅

津田博士と御親交のあった尾関先生宅には博士の書簡、原稿、発禁処分になった博士の著書、尾関先生撮影の写真、博士のアルバムから許可を得て撮られた写真、『郷土の光津田左右吉』を編集されたときの資料などが保管されています。

故小森庸平氏宅

元下米田中学校長であった小森先生宅には津田博士が蔵書を下米田小、中学校に寄贈されたころの書簡が残っています。

東中学校

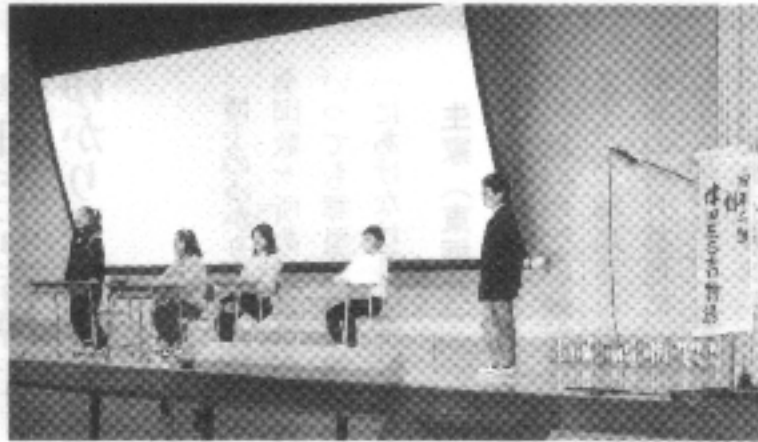
津田博士の代表的な著作『文学に現はれたる国民思想の研究』第一巻から四巻までと全集二十四巻(自叙伝他所載)が保管されています。二十四巻には「子どものときの思い出」「子どものときの思い出以後」「明治十年代の田舎の小学校など」博士の原体験を知る上での貴重な資料となる博士自らの少年時代の思い出が載っています。

次号に続く

「津田左右吉物語」

下米田小学校

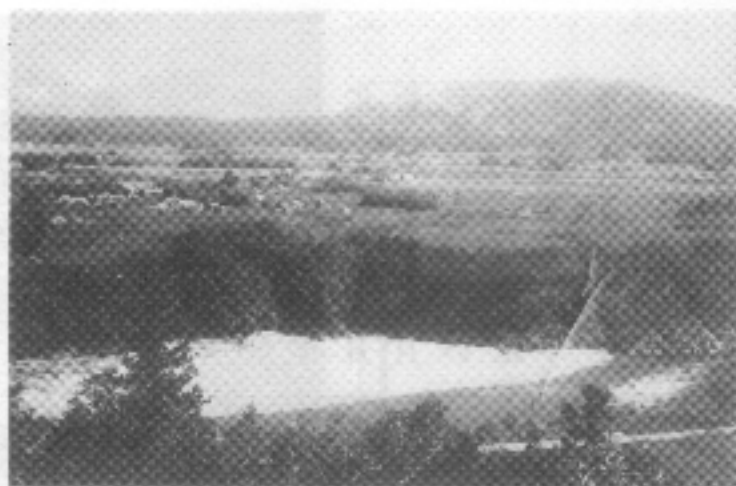
十一月十五日(金)に行われた学習発表会(祖父母参観日)で、恒例になりました劇「津田左右吉物語」が四年二組の児童たちによって上演されました。下米田小学校の先輩である津田博士の一生を台本づくりから取り組みました。学級全体で挑んだ劇は、博士の学問の偉大さばかりでなく、人間味あふれた部分を表現されて、とても見応えがありました。



少年時代

『子どもの時のおもひで』より

村 瀬 英 彦



昭和十二・三年ごろの下米田

津田博士は、明治六年十月三日の明け方に母勢以さんの実家で生まれました。母の実家は、杉村という現在の名古屋市北区のあたりです。

この当時の日本は、徴兵令や地租改正条例の布告、征韓論をめぐり明治政府の分裂など、めまぐるしく変化した時代です。また、太陰暦が太陽暦に改められ、神武天皇紀元も同時に制定された年です。

津田家は、尾張藩家老の竹腰家の家臣でした。明治二年、主家から「帰農」を命じられ、その領地であった米田の地に移りました。同じように米田に何人かの家臣が移ってきましたが、そのほとんどが「やまが」の暮らしになれることができず、名古屋に帰っていったのです。「やまが」とは、山の中という意味です。

博士は、当時の米田のことを「やまが」と表現されていますが、『榊井村差出明細帳』によれば、明治五年の榊井村は、家数は二〇六軒、人数は九八人、馬は五匹、大工職人一人です。医師、酒造、醤油造、鍛冶、鋳物、紙漉、染物、油絞な

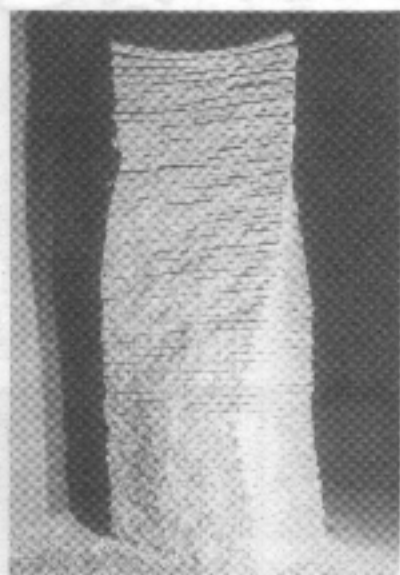
どを営む人はいませんでした。高札場、漁場などありませんでした。明治元年、現在の川辺町の西榊井と美濃加茂市の東榊井は合わせて榊井村でしたが、明治七年に、飛騨川を境として西榊井村と東榊井村にわかれてしまいました。

これに対し、母の実家である杉村は、名古屋の城下に近いため早くから町屋や武家屋敷となっていて、ころでした。幼い左右吉少年にとって、杉村は「まち」で、東榊井は「やまが」に映ったことでしょう。

お知らせ

佐光庸行氏

平成七年十一月二十一日逝去。彫刻家として活躍された佐光氏は、市中央図書館にある「知の積層」の作家です。顕彰会の活動をご理解いただいておりますが、惜しまれつつ他界されました。



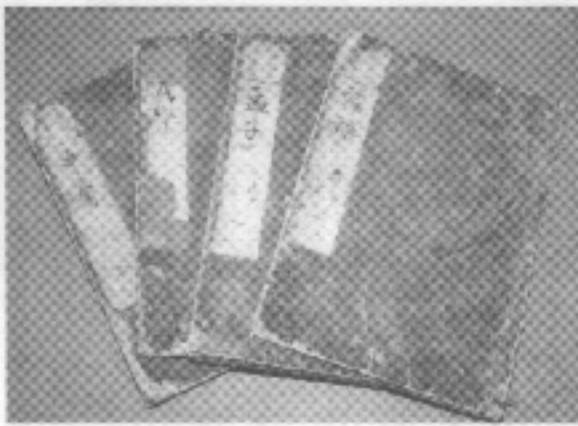
知の積層

津田博士の少年時代と 学者としての偉大さ

十一月一日に下米田小で、大澤頭彰会副会長が六年生を対象とした「津田博士の会」で講演されました。この時だされた子どもたちの質問をまとめました。

問一、少年時代はどんな子どもでしたか。

東橋井に、津田藤馬さんの長男として明治六年に生まれました。明治五年、文明義校という小学校が隣の福島村（現川辺町）にできました。藤馬さんはその助教（先生）でした。岐阜県庁が岐阜に移され「岐阜新聞」がはじめてできた年で、津田さんの家ではこの新聞を取っていました。藤馬さんは、明治十年に発行された『花月新誌』（日本最初の月刊雑誌）も読んでいました。岐阜新聞は明治十四年に岐阜日々新聞と名前を変えましたが、左右吉少年



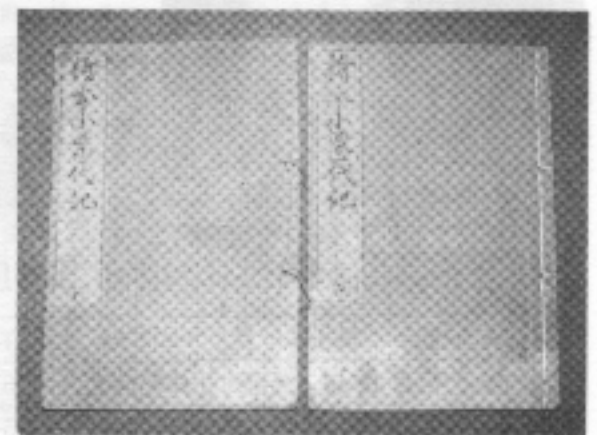
「四書」

ました。とりわけ日本外史の話がおもしろくのちのちまで忘れられなかったのです。算術（今の数学）も好きで学校で習ったことを、家

はこれらを読んでいました。この新聞の主筆であった鍵谷磯北の岐阜く東京間の紀行文を読んだ、いつしかこのような文を自分も書いてみたいと思うようになり、暇を見ては和紙を二つ折りにして綴じた自作のノートに作文を書いていました。また、四歳から父に習った四書（論語、大学、中庸、孟子）孔子の教えを述べた書（意味を考えず、文字だけを見て声を出して読むこと）を受け、学校では特別に放課後、森先生の漢籍（漢文の本）の講義を受け

ました。と

で復習し予習もしました。ローマ字も習い、家での読み物として、小栗判官、照手姫の物語とか、『水戸黄門仁徳録』などを繰り返し読んでいました。その手あかの



「繪本小栗一代記」

される直前まで研究に励まれたことは「学者の老健」として世間の識者を驚かさせました。二、不当な権力に屈せず、学問の自由を守られたことです。岩波茂雄氏とともに、五年に及ぶ裁判にかけられ、

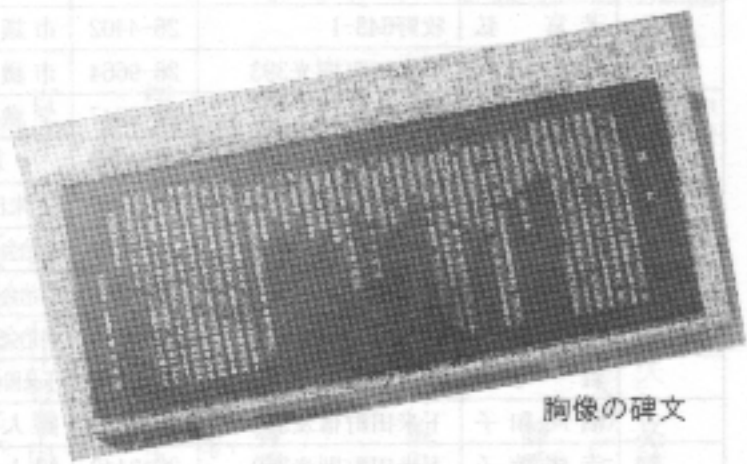
自己の信念を曲げず、無罪を勝ち取られたことです。

三、名利（名は自分の名声、利は利益、お金儲け）に遠ざかり、清貧にあまんじた生活を生涯続けたこと。四、津田博士ご夫妻は大変思いやりの深い方で、何人もの出会った人や知人にそれをしていきます。



津田左右吉博士 胸像

夫妻逝去後、全財産は早稲田大学に寄贈され、毎年多くの学生が奨学資金を受けています。五、博士の残された学問的業績は数多くありますが、下米田小学校にある津田左右吉博士の胸像の碑文に詳しく載っています。この碑文は、栗田直躬早稲田大学名誉教授が書かれたものです。特筆すべき業績は「思想史学」の開拓です。



胸像の碑文

問二、津田博士のどんなところがすばらしいですか。（学者として、人間としての偉大さ）

一、生涯、学問研究に精を出されたことです。八十九歳で逝去

【問い合わせ】
津田左右吉博士顕彰会
【事務局】
美濃加茂市教育委員会 文化課
☎ 0574-28-8551